

淨土

1980-4

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別送達郵便）第三二五
昭和五十五年三月二十五日印刷
第四十六卷 第四号

第四号



善導大師一千三百年遠忌慶讃記念号

薫風に導かれて

「春風胎動として……」のびやかな好季、陽春の風情を言い得た名文句どおり、春に吹く風は実に快い。すき間風に、思わず身を縮めていたのがうそのように、窓辺から吹き込む風はどこまでも甘い。それはまた、暖かさのバロメーター、花だよりや楽し気に飛び交う小鳥たちのさえずりを乗せて来るからだらう。

私たちは、四季それぞれの気象状況に対応



し、順応しながら生活している。このうち風は、風見鶏ではないが、さしずめ季節の先駆といえる。折々に吹く風によって季節感を十分に知り得るからだ。それには薫風もあれば不快感を覚えるものもある。

「春一番」によって、温暖な春の到来を告げられた私たちは、厳寒から開放され、野山に行業としゃれる。やがて梅雨。寒さに逆もど

りかと思わせる。小雨まじりの風は無情だ。

そして、ようやく梅雨が明けたとしても、十分に湿気を含んだ風は、高温多湿の不快感を振りまく。振りまき終る頃に、やっと涼気味をえるのもつかの間、この頃、四季を通じての最大の難関、台風に遭遇する。過ぎ去るのを、じっと待つしかない。無事に過ぎれば、実りの秋だ。紅葉はどこまでも美しい。だが、吹く風に一葉一葉散りゆくさまは、無常そ

のもので寂しさが伴う。やがて、雪まじりの木枯し吹く頃ともなると、耐乏の季節、冬の到来となる。

少し偏向気味な見方になってしまったが、春荒や春雷を除けば、概して穿った見方ではないかと思う。それほどに春はのどかそのものの、爽やかな季節である。

この好季に、私たちは「花まつり」を迎える。花の園「ルンビニー」でご出生なされたお釈迦さまにも、この春の薫風はそそいだことであろう。この余薫を伝える風は、お釈迦さまのみ教えを乗せて、時を超え、国を越えてふりそそいで今日に至っている。目に見えない風ではない。肌に伝わる風でもない。心の中に燈を点す風だ。

春風は快い。だが、季節にとらわれることなく吹くこの薫風は、いつでも、どこにでも差別なく吹いている。りりしく立つ誕生仏に思いをはせ、その薫風の中に生き生かされている、ただ一度の人生を、より実りのあるものとしたいものだ。

(長谷川宣丈)

四月号



たとい汝等百千万億あって生ぜず
 ということも、ただわが往生の信心
 を増長し成就せん。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集1 P.106)

目次

特集 善導大師一千三百年

- 遠かりし終南山への道(二).....稲岡 覚 順...(2)
 玄中寺の月.....竹 中 信 常...(5)
 善導大師に学ぶ
 —「今」「共」二字の生活基盤—.....宝 田 正 道...(10)
 あゝ 善導大師.....一 田 善 寿...(15)

法 話

- 花まつりに寄せて.....坂 野 泰 巨.....(24)

特 別 寄 稿

- 法然上人『勅修御伝』の英訳について(一).....石 井 真 峯...(20)
 〈随想〉ほとけとの出会い(七).....佐 竹 隆 三.....(28)
 (ず)(い)(そ)(う) 英国のパブリックスクール.....長戸路 信 行.....(32)
 浄土句集.....一 田 牛 畝 選.....(36)
 〈表紙のことば〉月夜狐.....土 屋 正 男.....(19)
 〈表紙裏・巻題言〉薫風に導かれて.....長 谷 川 宣 丈
 念仏ひじり三国念仏——法然をめぐる人々.....寺 内 大 吉.....(38)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

特集 善導大師一千三百年

遠かりし終南山への道(二)



大本山金戒光明寺法主

稲岡 覚順
いな おか かく じゅん

一 友好の翼の成果

浄土宗の中国理解者として、その友好促進に努めてお

られる諸徳は多いが、その内推尾弁匡（増上寺法主）、大河内隆弘（伝通院貫主）、岸信宏（浄土門主）、塚本善隆（華頂学園長）の四師の事蹟は顕著である。然るに推尾、大河内の両師は既になく、岸門主は昨年十一月三日ご遷化、

塚本先生は本年一月三十日ご逝去となり、本宗の中国理解者の相次いでる喪失は、誠に残念でうたの感に堪えない。

特に「私のような老学が現身で終南山を訪ね得ようとは思わぬが」と自ら髀肉の嘆をもらされていた塚本先生が、昭和五十三年十月第一次浄土宗訪中団に、老軀を押して参加され、日本浄土教徒として最初の香積寺訪問を果たされたことは、前号所載の通りである。

これは正に先生の本懐であったのみではなく、同時に全浄土門徒の喜びであったのである。

この香積寺参拝の歴史的快挙が契機となって、浄土宗の日中交流、祖跡参拝の動きは油然ともえ上り、翌年五月（昭和五十四年）、浄土宗友好の翼一行九十三名の大挙訪中となり、又全国各教区や宗内各種団体による、祖廟参拝を喚び、図らずも高祖遠忌記念事業は、祖跡参拝、日中友好促進の形で、意外の発展を見るに至ったのである。

就中友好の翼による訪中を通して、高祖の靈跡終南山香積寺の整備計画は、意外の成果を産み、これによって昭和五十五年（本年）五月十四日を期した日中協催による

現地大法要への明るい見通しが確立したことは望外の喜びである。

これは一重に中国側の好意と、本宗側の熱意とのふれ合いの結果であって、相互信頼がよんだ美談として、永く評価されるべき事蹟というべきである。

そしてこの中国側の好意は、中国仏教協会を代表する、趙樸初先生の理解ある配慮の一語につきるものであるから、少々裏話的になると思うが、この機会に友好の翼による訪中の折、趙樸初先生と私との間で交された、談話の一端にふれさせて頂くこととする。

二 趙樸初先生の所信の内容

五月二十一日の北京空港に到着した友好の翼の吾等一行は、例の如く中国仏教協会その他の要人多数の出迎えをうけたのであるが、その中に趙樸初先生の姿はなかった。聞くところによると、先生は病氣入院中とのことである。驚きと不安の中に、翌二十二日広濟寺（中国仏教協会本部）を表敬訪問したが、趙樸初先生は思いの外元氣のお姿で、吾等を迎えて下さったのである。医者から外出を許されて来たとのことである。かけ変えのないお方で

あるから、くれぐれも御自愛を祈ったわけである。先生は二十七日以後、吾等一行と共に病いを押して西安まで同道され、香積寺法要にも参加されたのである。そして、一日中行動を共にされ、その間随所で私と会談を交され、特に同夜は態々私の宿舍まで来訪されたのであるが、この間を通して発表された、中国側の構想や先生の所信は、概ね次の如くである。

五月二十七日夜、西安人民大厦の私の宿舍に趙樸初先生は来訪され、岸門主へのお土産や善導大師遠忌を賛える讃詩を頂戴したが、香積寺復興については、次の如き力強い所信の表明があった。

「善導大師千三百年に当り、香積寺史蹟の整備計画を担当させて頂くことは、私に課せられた光榮ある任務である。この整備計画は今まで北京において、机上で立案し指図をして来たのであるが、今現地における實際指導の必要を感じた。私の今回の西安入りについては、一つは稲岡団長を香積寺に案内することであり、一つは現地における整備計画の検討が目的であった。既に香積寺整備の作業は、着々進んでいるが、これは明年の遠忌法要

までには完成させたい」

又この整備に必要な経費は、中国側の支弁によって行なうと前提されて、

一、整地の整備（約五十坪に拡充する）

二、十三層基塔の修理（既に着手中であつた）

三、礼拝堂や僧堂の建設（『浄土』二月号・巻頭言に佐藤行信先生の撮影が掲載されている）

等の詳細を発表されたのである。

趙樸初先生のこの好意にみちた発表の内容は、全く予期しなかつたことであり、本宗の感激一方ならないものである。

依つて本宗はこの中国側の好意に対応しつつ、現地法要成功に遺憾なきを期し、善導大師尊像の発遣、幢幡仏具、石塔等の発送、又阿弥陀経運動等の計画を進め、又これに必要な経費については、宗門関係学校、布教師会その他宗門各種団体の協力による募財計画が進められていることは心強い。

香積寺整備計画の詳細その他については、次号にゆづらせて頂く。

(つづく)



玄中寺の月

たけ なか しん じょう
竹 中 信 常

(大正大学教授・文博)

人から篤懇な教えを受けたことがある。当時は戦争の苛烈な時で、しかも中国は日本にとっては、共に天を戴かぬ敵国であったが、菅原上人は当時から、中国についての造詣が深く、日本が中国と干戈を交えることを非常になげかれ、若い筆者にまで、中国の文化と思想がいかに深く日本に影響を与え、ことに仏教思想の面では、中国仏教を抜きにして日本仏教は語れないことを、くり返しくり返し話して下さったものである。

そしていつも言われるのには、

「竹中君、一度わしの寺へ来たまえ。わしの寺の境内には、曇鸞大師ゆかりの玄中寺から持って来て植えた

東京・浅草の東本願寺の門中に菅原恵慶老師の住職している「なつめ寺」というお寺がある。菅原上人は人も知る中国通の方で、戦中、戦後にかけて、浄土宗・伝通院の故大河内隆弘上人と共に、日中友好に尽粹されたことは有名である。戦後いち早く中国人俘虜の送還に努力し、また、いまだ国交断絶していた中国に渡って、日本人戦死者の遺骨の引取りなどにも政府を先がけて着手された。筆者は縁あって若き日、菅原上人のもとで仏教界関係の仕事を手伝ったことがあり、親子ほどもちがう上

ナツメの木があるから、是非見てくれたまえ」

とすすめて下さるのだった。生来ものぐさの筆者はとうとうそのおすすめに従う機会を持たぬままに終戦をむかえてしまった。そして、菅原上人推轡のナツメの木も戦火にかかって焼失してしまったとのことである。

しかしその一本のナツメの木が、曇鸞大師と深い教縁のある東本願寺の末寺の内庭で、断絶の両国の間の懸橋となつて、戦後になつてむしろ、立派に実を結んだわけである。



爾来、三十余年、忘れるともなく心の片すみにひっそりの残こされていた菅原上人とナツメの木とが、鮮烈な思い出となつて筆者の胸中に湧き上がる機会を得たのである。それは一昨年秋、選ばれて第一次浄土宗訪中代表団の一員となつて、遠く中国を訪れることができたからである。

むろんこの訪中の大目的は西安寺南郊の神禾原にそそ

り立つ善導大師の墓塔に参拝回顧することであつたが、このことについてはすでに多くの同行者の報告がなされているので、ここにはむしろ筆者個人のひそやかな感懐として、十月十日から十一日にかけて、山中の古寺玄中寺一泊の思い出を描くことにしたのである。

旅窓匆忙の中にしるした日記によると、北京四泊の諸行事を済まして、十月十日午前八時二十分、双発プロペラの特別機にて太原に飛ぶ。中日友好協会副会長、中国仏教協会責任者、というよりも中国仏教会の代表者であり、真に日本仏教界との提携の中心人物である趙樸初先生を始め、中国仏教会の本部広済寺の住職である正果法師、さらに清泉法師その他の人々も行を共にし、一時間半、赤土の山嶺の上を西に太原空港に直行。市内の迎沢賓館にて少憩のち車をつらねてさらに西へ二時間、山西省交城县所在の玄中寺へ出発した。石壁山の号を持つ玄中寺は山号の示すとおり、切り立った石壁にかこまれた深い溪谷を隔てて、約三百メートルの山腹に千古の歴史を秘めて寂然として静まっていた。

玄中寺は中国における浄土教の祖曇鸞大師、曇鸞大師の事蹟をしるした碑文に感応して浄土門に帰投した道綽



—石壁山玄中寺風景—

禪師、そして道綽禪師より『観無量寿経』の教旨を授かり念仏信仰を高揚した善導大師のゆかりの地であり、現に寺内には三祖堂が建てられている。われわれが訪問した時、たまたま三祖堂を新たに建立する事業がおこなわれていたが、われわれは旧来の祖堂にお参りすることができた。

堂内には前記三祖像はむろんのこと、他にくさぐさのものが祀られていたが、その一隅に、われわれ浄土宗徒としてまことに縁の深い三つの位牌が丁重に祀られていたのである。その一つは浄土宗の碩学であった椎尾弁匡大僧正、その二は伝通院法主であり日中友好に尽力した大河内隆弘上人、そして第三は敦煌発掘で有名な大谷探検隊の大谷光瑞師の三つであった。大谷師はとにかく、椎尾・大河内両上人は筆者にとっては並々ならぬ御恩を頂いた方々であるが、その方々と雲煙万里の遠い異郷でお会いできるとは夢にも思わぬことであった。趙樸初先生は牌前に一席の話をされたが、それによると、終戦直後、中国の要人に交って来日された時、どういう行違いか趙先生の入国が不許可になったそうであった。その時、椎尾法主はすぐにその筋に声をかけて速刻許可をと

って下さった上、離日に際しては目の不自由の中をわざわざ羽田まで見送られ、固く握手された、と感激をこめて述懐された。中国の人々がよくいう周恩来副首相の「水を飲むものは、井戸を堀った人々の労苦を忘れてはいけない」という言葉を、趙先生はこの時も引用されて、今日、日中の仏教徒が近々三時間の飛行で気安く行き来することのできるようになった日中友好の裏に、先人の労苦のあることを論され、われわれの頂門に一針を加えられたものである。

玄中寺の山門をくぐって本堂に向って右の中門の敷居を跨ぐと、三方を宿房にかこまれた中庭がある。その中央にかなり年を経たナツメの木が植っている。それを見た瞬間、筆者の胸底に浮かびあがったのは「ナツメ寺」の菅原惠慶上人の鶴の如き風姿であった。「ああ、これが、菅原上人のお寺のナツメの親木なのか。」ここでもまた、ゆくりなくも若き日の思い出にめぐり会う機会を得たのである。

玄中寺が浄土宗の諸師たちの出会いの場であったことはよく知られているが、はからずも筆者にとっても、玄中寺は若き日の思い出の火を掻きたてるよすがとなった

のである。



山沿いに建てられた千仏堂や諸碑堂をめぐり、曇鸞・道綽両師の結縁の碑を眺めたりするうちに、西に石壁を負う玄中寺には早くも夕闇が迫り、住職の明達法師の導師による夕方の勤行の時間が来た。われわれ一行も威儀を正して随喜参拝した。まさに日中仏教の儀礼交流であり、ナモオミトーフの念仏を唱和して祖師堂などを行道した。その間、在家居士の趙先生が敬虔な態度で誦経礼拝されていたのが印象的であった。

夕餉は今回新しく境内の西南に建てられた食堂で、そのために特に献立てされた精進料理が供された。出る品ごとに一同舌鼓を打ったが、その材料は蓮の実、クルミ、柿の葉、キノコ等々、それに豆腐に手打ちウドンなど山の幸、野の幸が十数皿である。聞くところによると、すべてが玄中寺を中心とする山中にとれたものであり、それを今日のために村人が数十人手分けして調理したとのこと、これまで多くの日本仏教者が訪れたであ

うが、こうして勤行を共にし、食卓を囲み、しかもこれまた、われわれのためにベットまで搬入してしつらえられた宿房に泊めて貰えたものは数少ないのではなからうか。

十月半ば、山中の空気はさすがに冷え冷えとしてくる。満腹の一同は中庭に面する宿房にそれぞれ引上げて、各自居すまいを決めてから同室の人々と今日の日の感懐を語り合い、明日の路程に思いを馳せながら枕に就いた。

山はさむいと注意されて、風邪に弱い筆者は内心ビクビクもので、毛糸のジャケツを重ね着して、心づくしの新しい毛布にくるまってねたのであるが、案外に暖かく夢路を迎えることができた。

夜中、フト目ざめて手洗いに戸外に出る。山気しんしんとして、吐く息も白く、さすが中国北辺の山中だけのことがあると思ひながら用を済ませて戻ってくると、石壁山頂に皓々と月が輝き、静まりかえった下界を昼のようには照らしている。中庭の石畳が白く浮きあがっているところに、昼間見たナツメの古木が黒々とその影をおとしているのであった。

村瀬 秀雄 著

|| 新刊 ||

『和 訳 六 時 礼 讃』

善導 大師

B 6 判 二六五頁 価二四〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 観 經 四 帖 疏』

善導 大師

B 6 判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 選 択 集』

法然上人

B 6 判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 浄 土 三 部 經』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会



善導大師に学ぶ

——「今」「共」二字の生活基盤——

たから だ まさ みち
宝田正道

(浄土宗出版事業協会主幹)

善導大師の教えや行業については、特に一千三百年遠忌を迎える今日、いろいろな学者や布教師の方々が、すでに多くの著述や講演その他を通じてこれを明らかにされている。そして、宗祖法然上人が『観経疏』の「一心

専念弥陀名号」云々の文によって浄土宗を開き、弥陀の化身として、あるいは「高祖」として「偏依善導一師」を標榜、尊崇せられたことや、二祖聖光房弁長(鎮西)上人がこれを受けつぎ、善導の再誕といわれるほど高祖に心酔して浄土宗に「善導宗」という別名まで考えられたことなども、広く人口に膾炙している事実である。

そこで私は、一般在家の檀信徒の立場から、大師の日常生活を中心として学ぶべき二、三の点、特に「今」と「共」を強調された大師の行業の一端について、若干の

感想と私見を述べてみたいと思う。「今」は時間的な一刹那ということであり、「共」は空間的にみんな一緒にという意味であることは、いうまでもないが、大師はこの二字を日常の基盤として生きられたと思うからである。

一 「今」を大切に

善導大師は、唐の永隆二年(六八二)三月十四日に、世寿六十九歳をもって亡くなられた。古稀を俟たずして逝かれたわけであるが、その一期の行状はきわめて多彩しかも峻厳を極めたものであった。すなわち、化他の面においては、浄土変相図を三百舗も描いたり、阿弥陀経を十万巻も書写したりして有縁の人々に分ち与え、また多くの讃偈文を作って音楽的な教化を試みるなど、視聴覚

に訴える芸術的手段を用いて、当時の中国大衆の信仰を導かれた。一方、自行においては身を持することすこぶる堅固で、粗衣粗食、坐して供養を受けることなく、釈尊に準じて行道托鉢するほか、入浴以外は法衣をぬがず、横臥さえ避け、冗談はもとより世俗の徒事さえ口にされなかったという。しかも、寒中さえ汗を流して力尽きるまで念仏行道を続けるという日課であった。

そのかたわら、著述に励んで公にせられたのが、いわゆる「五部九卷」である。すなわち、『観経疏』四卷、『法事讃』二卷、『観念法門』『往生礼讃』『般舟讃』各一卷、合せて五部九卷となる。いずれも遊び半分、筆にまかせて書き流したというものでは決してなく、それぞれに一字一句、想を練り文を考えた上で執筆された高著ばかりである。

かりに大師が、三十歳から実際の自行化他活動を開始せられたと仮定して、臨終の夕まで約四十年間、右に挙げたような行業を続けられたとすると、これは大変な努力と才能の要る前代未聞の大事業といわねばならぬ。

例えば、阿弥陀經の写經一つを取上げてみても、四十年に十万卷を正しく淨写するには、年間少くとも二五〇

卷は仕上げなければならぬ勘定となる。一日当り〇・六八卷であるが、これだけが日課ならいざしらず、大師はこの他に、前記のごとく、やれ行道だ、托鉢だ、著述だ、説法だ、変相図だ、といった具合に、各種の仕事にも時間を割かねばならなかった。並みの人間が、お茶を飲んだりタバコを一服喫ったりして、適当な休憩をとりながら労働するのはわけがちがう。大師は恐らく、時間のやりくりを最も巧みに、合理的に配分してムダなく日課を果す術を心得て、それを確実に実践する意志の人ではなかったろうか。

要するに、大師は「今」という一瞬を十二分に貴重なものと認識した上で、厳しく日常生活を規制し、ややもすれば怠惰に陥って、「今」を無駄にしがちな凡人の心を叱り励ますべく、自ら範を垂れて六十九年の生涯を、それだけの大偉業で飾られたにちがいない。われわれは、その点を最も深く敬慕し学ぶ必要があると思う。

その証拠に、大師は無常ということを非常に強く教えておられる。無常は無我や縁起などとともに仏教の根本思想を語る術語の一つであって、この世のものはすべて移り変り一瞬といえども同じ形でとどまっているもので

はない、という意味である。そこから人生のはかなさを知る無常観という言葉も出てくる。

末法思想の到来を告げる時代思潮を受けて、中世には特にこの無常観が一般に広く流布した。有名な『平家物語』の巻頭をはじめ、鴨長明の『方丈記』、法然上人の『登山状』、後鳥羽院の『無常講式』その他、蓮如の『白骨のお文』に至るまで、いずれも人の世のはかなさを説く名文として名高いことは、ご存じのとおりである。

ところが、善導大師は、これらより五百年も早く、すでにその著『往生礼讃』の流麗な偈文を通じて無常の觀念を強調し、「十四行偈」（觀經疏玄義分）でも「今逢釈迦仏」「今乗二尊教」などと二度にわたって「今」を使い、「今」の一瞬の大切さを自行しつつ教えて下さっているのである。

一々例をあげるまでもないが、日没・初夜等の六時に各無常偈を説き、「人間忽々として衆務を営み、年命の日夜に去ることを覺らず、灯の風中に滅きなんこと期し難きが如し」（日没）とか、「時光遷うつって流転し、忽ち五更の初めに至る、無常念々に至り恒に死王とともに居す」（後夜）とか、「人生ける時精進ならずんば、喻たとえば樹の

根なきがごとし、華を採って日中に置かんに、能く幾時か鮮かなることを得ん」（日中）とか、歌っておられる。これらは、いずれも巧みな譬喩と詩想によって、人命の無常須臾の間なることを示し、強健有力の時こそ自策自勵して勇猛精進、常住を求めるべきであることを説示されているのである。

われわれもまた、昔から「時は金なり」「光陰矢のごとし」「一生は夢のうち」「人の命は朝の露」など多くの金言・格言・諺の類から、いつ死ぬかわからぬ人生の短さや時の貴重さを学んでいるはずである。しかし、それが「今」の積重ねである以上、「今」を充実させることが根本であるというところまで深く考えないで、ついみすみすと一瞬一刻を空費していることが多い。正受老人（臨済宗の慧端）は、「一大事とは今日ただ今の心なり。それをおろそかにして、明日あることなし」といったが、「今」の一瞬を精一杯生きていることの尊さを遺憾なく教えてくれている点で印象深い。

時間は、十代ごとに半減する、といわれる。三十代は二十代の、四十代は三十代の、五十代は四十代の、それぞれ半分しか仕事ができない、という意味である。つま

り、人間は年をとるごとに、体力・技能・思考力が衰え弱まる一方、俗事に妨げられて能率はがた落ちとなる。十分に時間を生かしきれないわけである。後は気力だけが頼りとなる。だからこそ、大師も「強健有力の時」からの精進を特に強調されたのである。

しかも、大師は「今」を十分生かすことを他人に教えるとともに、自らそれを実践された。そのため、六十九歳で亡くなっても、結構八十や百までの長寿を保ったと同じ以上の業績を残していかれた。当時、大師より二十年早く示寂した玄奘三蔵は、十六年の長歳月をかけてシルクロードの難路を求法のため往復し、帰国後、さらに十八年もかかって多くの經典の翻訳事業に従った、という。また、大師滅後間もなく生れた鑑真和尚は幾度かの航海に失敗を重ねつつ来日して盲目となりながらもわが国に戒法を伝えたのである。すべて気力の勝利である。

玄奘・善導・鑑真、この偉大な三人の唐代僧が、ほとんど相前後して出世し、仏教の東漸と中日文化の交流に尽した貢献は、はかりがたく大きい。その根底に「今」をつなぐ精神力の強さがあったことを見逃してはならない、と思う。今、その詳細を語る紙数はないが、少くとも

も善導大師の行業を通じてだけでも、われわれは「今」の大切さを十分に学びとり、その血の出るような努力精進の跡を見習いたいものである。

二 「共」の精神

もう一つ、善導大師に学びたいことは「共」の精神である。大師の五部九巻を読むと、随所に「願共諸衆生」「共発金剛志」とか「皆悉与衆生共之」とかいう具合に、「共」という字が多く使われている。その時と場合によって、「時衆」「大衆」「衆生」などと表現は一定でないが、とにかく一切の人々と「共」に、発願とか往生とかを期す、といわれているのである。つまり、自分一人だけではなく、道俗らすべて、みんな一緒に、ということを終始口にしていられるのである。

紙数がないので簡単に述べるが、この「共」の精神はまことにすばらしい。椎尾井匠先生の主唱せられた「共生会運動」の主張の一つに、「同信協力を通じて成就衆生の大道をたどらんとするもの、国境も民族も簡ぶところではない」という趣旨が込められているが、大師は、まさにこのように広く大きいグローバルなスケールのも

とに一切の衆生が、みなもろともに願往生無量寿国の目的を果すよう、念願指導されたのである。

今日、広くは世界のあちこちで、狭くは各個人の家庭内においても、兄弟離にせめぎあう紛争や対峙の人間感情は跡を絶たない。いわば同入和合海をめざす「共」の精神が欠如しているのである。口では民主とか共和とかいっても、なかなか実践的にみんな仲よく、とはいかないのが国際関係というものであろうが、大師は、せめて願生浄土の思いを有する人間同士だけでもみんな揃って素懐をとげることを力説された。それが「共」という一字で表わされているのであるが、試みに善導大師の全仏教観を示すといわれる『観経疏』玄義分巻頭十四行偈の末尾を見ると、『日常勤行式』の「総回向偈」としても馴染み深い「願以此功德 平等施一切 同発菩提心 往生安樂国」という四句一行に、その精神が鮮かに述べつくされていることに気がつくであらう。「平等」も「一切」も「同」も、すべては「共」の発露である。その点で、この偈は特に大師の教えの帰結としてふさわしく、日常勤行の結びの回向文として目ざとくもこれを取入れた先覚者の目の高さはさすがである。あらためて深い敬

意を捧げるに吝かではない。

三 むすび

以上のように、善導大師は日常生活の基盤として、特に「今」「共」二字に重きをおいた布教を心がけられたことが明らかであらうと思う。われわれは、大師を通じて法然上人を介し、また、じかに現代の布教師ないし檀那寺の住職、さらには諸学者の論説や著述を見聞することによって、専修念仏一行の信仰を教えられているが、その日常生活と導空二祖の教学とは、とかく別々のように考えがちである。しかし、社会人として生きている以上は、「今」「共」二字のもつ大切な意義を知り、それを実行に移すことをゆるがせにしてはならないと思う。大師の教学を学ぶことは必要なことであるが、同時に大師の厳しい生活態度の中から、われわれの反省の糧としての「今」「共」二字の精神を十二分に学びとり味わい、努力精進の日々を送ることも忘れてはならないのである。千三百年前の大師の行業を、われわれ現代人の「魂のふるさと」として顧みそれを今日に生かすことこそ、願生比丘善導大師讃仰の最大眼目であると知りたい。



あゝ 善導大師

いちだぜんじゅ
一田善寿
(福岡市正定寺住職
ホトトギス同人、俳号牛畝)

私は中国仏教協会会長の趙樸初先生の御高配に依り日中友好浄土宗代表の団員に選ばれて、昭和五十三年十月

六日より十八日までの十三日間訪中しました。特に一千三百年前になくなられました善導大師の御遺蹟を巡拝する光榮に浴することが出来ましたことは喜びの中の喜びでありました。

長江の流れは黄色水澄まず

さて、飛行機より黄色く濁っている揚子江を見下ろし着いた北京は、

綿雲の散華の北京天高し

そして、綿を千切り投げた如きよい天気でした。

趙樸初歓迎の声爽やかに

会長の歓迎の爽やかな言葉に迎えられ、北京飯店に宿泊しました。翌日は中国仏教会主催のレセプションが北京烤鴨飯店にて催され、

北京の料理のうまさ夜長かな

前菜に蓮の実よばれ北京の夜

中国の僧と握手や菊の宴

まことに暖かい北京料理をよばれながら、僧と握手し語り合うことが出来ました。特に日中条約締結直後でありましたので園田外相の話となりましたので、「私は園田外相の母の剃度の師であります」と中国僧に申ししたのであります。外相は熊本県天草の浄土宗崇円寺の檀家で、十年前その寺の五重勸誡に私が行き、母上が五重に入会され、剃度伝法を受けられたのです。五重相伝と申しましても中国僧には分らないため、そう説明しますと、他の同行の人は拝まなかったが、私のみが拝まれる光栄に接したのであります。

中国の僧に拝まれ菊薫る

毛主席の記念堂に参拝しました。ここは開門と同時に参拝の人波が絶えないので、正面に主席の石像があり、その後室に生けるが如く遺体が水晶の棺に透明に安置さ

れています。参拝する人々は花も線香も供える人はなく、手を合せる人もなく見物に来ているように思われましたが私共は、

毛主席に菊の花環を捧げけり

毛主席いたむ心や秋の雨

毛主席活き在すこと秋灯

と菊を捧げ合掌したのであります。外は雨がしとしとと悲しむ如く降っていました。

石壁の玄中寺へもまいりました。

道綽の善導迎へし野菊橋

道綽禪師が善導大師を迎えられました橋は、野菊が咲き乱れていました。その橋まで玄中寺の住職明達法師以下寺僧十数人に出迎されました。

玄中寺の精進料理甘諸棗

これまでの宿泊はホテルばかりでありましたが、

新しき布団に泊る玄中寺

私共のために新しい布団や寝具が用意されて、玄中寺に泊めて貰ったことは忘れることが出来ません。

石壁の塔にかかれる後の月

その日は旧九月十五日で、後の月が石壁の塔にかかり一千三百年の昔善導大師が拜まれたこの月をと思えば、大師恋しなつかしの念でいっぱいでありました。

この玄中寺は山西省太原の近くで善導大師は道綽禪師の名声を聞かれ、お訪ねになったのであります。時に大師二十九歳、禪師八十歳でありました。禪師は安樂集を著され、又観無量寿經二百回を講説され、日に七万遍も念仏を唱えられた念仏行者であります。大師は禪師から觀經を授けられ、「念仏によりて間違ひなく誰も救済されますか」と尋ねられますと、「一本の蓮華をつんで仏のみ前に置きなさい。七日の間念仏し行道しても尚その蓮

華が枯れることがなければ念仏にて浄土に救われることの証拠である」と確信をもって答えられました。大師は禪師がなくなられるまで、玄中寺にて觀經の研究をされ阿弥陀仏への信仰を深められたのであります。

この様な寺に一夜の宿をすること出来たことは只々感激で、

秋風や晨鐘暮鼓の玄中寺

と、夕は太鼓、朝は鐘に起されて、三祖堂の基礎工事に参加し、

三祖堂再建賦役や秋の朝 玄中寺の土産に棗山椒の実

と土産まで貰って名残おしくも衆僧に送られたのであります。

善導大師の教化の道場は、西安(長安)の慈恩寺、光明寺で、慈恩寺は唐の高宗がその母への追善のために建立されたもので、光明寺は宗を異にする異学異見への教化

でありました。その様に両寺は人々を教化された寺でありましたのに反して、終南山は西安より二十キロばかりで、その悟真寺は、山僧善導として無位無官の修行地であります。

西安は王城の地や菊薫る

大雁塔小雁塔や天高し

鐘楼より終南山より秋霞

中心地にあります鐘楼より、遠く終南山は霞をすかして眺めることが出来まして、大師を思慕の心かられました。

広々とつづく平原棉の花

行けども行けども棉の花のつづく平原に、新しく自動車道が作られ、それが大師の墓塔があります終南山の裾なる神禾原^{しんかげん}まで続いていましたが、趙樸初先生の歓迎の詞の中に、「尊敬する日本の皆様の願により、善導大師の墓塔の遺跡を整地し参拝される自動車道路も作りました」

とのことで雀躍いたしました。

善導の十三塔や天高し

善導に逢ひし喜び秋の声

その墓は三十三メートルもありまして中天に聳えていました。大師の墓前に額き得たのが日本人で初めてであった喜びで、一行は涙して高らかにお念仏、誦経して大師の一千三百年の回願をいたしました。

私は死刑囚の教誨を三十年間行っていますが、一人の死刑囚がいよいよ処刑される時、「私はここに來てよかったです。人を殺したこの手を合すことを教えて貰いました。仏の在しますことを信ずることが出来ました。お念仏を唱えつつ死んで行く私は倖者です」といいました。

二河白道一念一步到彼岸

まさしく善導大師在しますずば、この死刑囚は往生出来なかったのに、彼は大声で念仏を称えつつ絞首台へ、そして大往生の素懷を遂げました。

表紙のことば

「月　夜　狐」

土屋 正男

公達に狐化けたり春の宵

なんの折にかよんだ蕪村のこの句が記憶の底に残っていて、菜の花の咲く頃になると思いたす。

東京生れの東京育ちで狐は動物園でしかお目にかかったことがないので、それだから余計に狐に化かされた話を聞くのがすきで、子供の頃には近所の話上手な大人達にせびっては息をころして耳かたむけたものだった。

そんなことほんとだろうかと思いたしながらも、狐はほんとに人間を化かすかも知れない、狐には不思議な霊力があって心に隙のある人間をみては誑すのだろう、だからお稲荷様のお宮にも座っているんだと思いました。

どんな山の中にも舗装された道が通り、車が往来する今日では、狐も人間を構ってゐるひまもないだろうが、人間もいろんな生物と遊べる不思議の世界から隔てられてしまったような気がしてならない。

法然上人『勅修御伝』の英訳について (一)



石井 真 峯

(大本山光明寺法主)

古い話であるが、大正十四年に法然上人『勅修御伝』

の英訳本が総本山知恩院によって発行され、私の書架にも一本ある。その巻頭に日本人の張り紙がついていて「ハーバー・エイチ・コーツ、石塚竜学共訳、英文勅修法然上人伝、右開宗七百五十年記念トシテ贈呈候也、大正十四年七月、京都知恩院門跡、大僧上山下現有」とある。大正十四年という私はまだ三十才を少し出た若者であったが、どうして、この立派な大冊を私などに下さったのかと不思議に思ったが、考えてみると、御伝英訳中の石塚先生が(当時芝中学の英語教師だった)、英訳のた

め多忙で時間がなくて困るから、当分、芝中学校で英語の代講をしてくれとのこと、私(当時早稲田大学高等学校教授だった)がしばらく先生の代理をつとめた。そのお礼として、英訳勅伝を頂いたことを思い出した。そして私は、翌大正十五年六月一日発行の『英語青年』第五十五巻第五号、第六号、第七号に「英訳法然上人伝について」の題で三回にわたって同書の紹介をした。

二

『英訳法然上人勅修御伝』は石塚竜学先生とキリスト教の牧師であったコーツさんの共訳で、「ホーネン・ザ・ブッデイスト・セイント、ヒズ・ライフ・アンド・テ

「イーチング」という書名である。(書名だけでも英文で書きたいのだが、英語専門の雑誌でない場合は、英語を入れると、誤植が生じるおそれがあるので、仮名がきにした)。

この英訳法然伝には、はじめに十九頁にわたるコーツ牧師並びに石塚先生兩名による緒論、二人の訳者の序文、解説、略語表、参考書一覧表、目次、両訳者による歴史的紹介、緒言(法然上人の生涯とその教え、緒言の注釈、次に「仏教の聖者法然、その伝記と教え」という序文、その序の注とあって、それらに約二百頁が使用され、ようやく本文の第一章に入るわけであって、実に懇切なものである。その第一章には脚注があり、そのうえ、第一章の注として、十五頁をあてているというわけで、最終の四十八巻が終わるまで七百八十八頁である。そのあと索引がABC順に三十八頁、次に漢字の字画による索引が九十四頁、すなわち百五十五頁で最終頁となる。

石塚竜学先生の序文を読むと、この英訳には実に十数年の年月を費しており、その間に先生のお嬢さんがなくなるという不幸もあって、大変な苦勞をしてこの英訳が完成されたことに頭がさがる。各宗宗祖の英訳伝記もか

なり出ていると思うが、法然上人伝英訳はそれらの英訳本のうちの最もすぐれたものの一つであると私は信じていて、両先生に対し感謝の念を禁じ得ないものがある。しかるに今日この英訳本の存在を知らない人が浄土宗内にも多くあり、全く利用されていないのではないかと察せられて残念である。大正大学、仏教大学、その他の図書館にはこの英訳本があると信じているが、やはり利用する人が甚だ少ないのではないかと察せられる。訳書の英文は非常に平易な英文で、英文専攻でない人にも容易に理解できると思う。

三

私がこの古い法然上人の御伝の英訳本のことを取り上げるには理由がある。

インドに興った仏教は山を越し、海をわたって中国に伝わり、或は直接、或は朝鮮經由で東漸して日本に輸出された。その間の労苦は大変なものだったと察せられる。ところが東漸して来た仏教は日本で足ぶみをしってしまったと考えられるが、それは私のあやまりだろうか。日本で仏教は足ぶみなどしていない、立派にアメリカの

領土であるハワイへ渡ったではないかと反論されるだろう。それはたしかにそうである。

この原稿はここまで昭和五十四年の春に書いた、そしてハワイ仏教について書き始めたが、私にはそれを書く資格がないことに気付き、中断した。青年時代アメリカへ留学した時は、船で北方航路を往復し、ハワイに寄港しなかった。昭和三十七年再渡米し、往復ホノルルへ寄港し、ホノルル別院へも参拝したが、往復とも一泊しただけでハワイ仏教は皆目わからない。そこで、昨昭和五十四年六月、ハワイ仏教及び米本土の仏教について少しでも多く知りたいと考え、渡米を思い立ったが、何分老齢であり、病気はなにもないが、頑健ではないので、二週間なら堪えられると思ひ、その予定で出発した。幸い、仏天の加護により、何の故障もなく無事帰国した。但し短かい滞在ではあり、また生来の無精から、十分な勉強は出来ないで成田へ帰って来た。

四

日本仏教がハワイへ渡って八十余年になるので、一昨年であったか、日本から数百名の男女の信徒がハワイへ

渡って大変盛大なお祝いがくりひろげられたことを新聞で承知し、結構なことであると喜んだ。数十年前にハワイへ渡った日本人労働者は大方砂糖キビの栽培に従事したようで、その労働は極めてきびしく、しかも与えられるものは少なく、生活はどん底のものであったと聞き、また、新保義道師の筆による『カフルイ浄土院七十年史』を読んでその実態を知り、初期日本移民の労苦を解し、頭のさがる思いであった。そしてこれらの労働は、今は多くはフィリッピン人によって行われていると聞いた。

初期移住の一世の日本人は二世、三世、四世の時代に移り、日本人の地位はすばらしく高められ、政界その他、各種の方面に立派な人材が生まれ、アメリカのために貢献していることの多いことはまことに喜ばしい。

五

以上のような苦勞を重ねた日本人に対し日本仏教各宗派の開教使の使命の重大であり、在留日本人に大きな慰安とはげましを与えたことは心から敬意を表し、感謝するに吝でないが、更に一步を進めて、アメリカ市民に仏

教を説き、仏教の法雲をその社会に降らせることは出来ないものであろうか。それが出来れば日本仏教そのものに与える影響も大きいと考えるが不可能なことであらうか。不可能でないにしても、非常な難事であると察せられないことはない。

そこで今は、逆に外国人キリスト教伝道師の日本における活動を、貧弱な私の経験から述べてみる。私の郷里は富士山の南麓にある、人口十一万ばかりの地方小都市である。ここに先年スエーデン人による教会、及びアメリカ人による教会が建てられ、私も両教会の宣教師と交際をして折々訪ねたことがある。市民の中にスエーデン人は一人もいない。もちろん、アメリカ人も一人もいない。伝道の相手はすべて日本人である。昨年夏の頃この両教会を訪れたところ、両教会とも若い日本人牧師が応対してくれた。マルモさん（スエーデン教会牧師）はいつ日本へお帰りですかと尋ねたら、近いうちに、とのこと。ライマーさん（アメリカ教会牧師）はいつ日本へ来られましかと尋ねたら、やはり、近いうちにといい返事だったが、今も帰っておられないようである。もっともピーターさんという若いアメリカ婦人宣教師はずっと居住して

おられる。

隣りの町の富士市吉原にフランス人の幼稚園がある。園長さんは、吉原カトリック教会の主任司祭ゴーチエさんで、私の自坊のある富士宮市にも同じ幼稚園がある。ゴーチエ牧師は吉原に住んでおられるので、そちらへ訪ねてお会いした。在日八年とのことだが、立派な日本語でしばらくお話をした。これらの外国人経営の幼稚園の園児はすべて日本の子供で、しつけがよいというので入園希望者が多く、入園が困難であるそうである。

ここには教会堂もあり、毎日曜日には六十名くらいの日本人が集まるそうである。

話をしているうちに、ゴーチエさんは立ちあがって書架から小形の一冊の日本語の本を取り出して、私はこの本を大変ありがたく読ませて頂いていますと言った。手にとってみたらそれは『数異抄』であった。そのほかにフランス訳の仏教書を書架からとり出して見せてくれたが、私はフランス語が読めないのです、何の本であったか思い出せない。

(つづく)

法 話



花まつりに寄せて

坂野 泰 巨

(茅ヶ崎市西蓮寺住職)

へむかし むかし 三千年

花咲きにおう 春八日

ひびきわたった ひと声は

天にも地も われひとり

摩耶夫人が、ルンビニーの花園で真紅の花のついた無憂樹の一枝を手折ろうとしたとき、右脇からお釈迦さまが生まれたという。

どうして右脇から生まれたのであろうか。

このことについては、難産であった証拠だという説もある。そのため、七日後に摩耶夫人はこの世を去ったのだと結びつけている。

また、お釈迦さまは真理の世界からこの世に出現されたのであるから、産道を通して生まれなかったという伝

説もある。キリストを生んだ聖母マリアも処女出産しているところから、何となく類似している感がある。

中村元先生は、「摩耶夫人は、立ったままでお釈迦さまを生まれたのである。最上の人びとは実に右脇から生まれる。そうして苦痛は生じない」と、『マハーヴァストゥ』の一節を引用されている。

かくしてお釈迦さまは、七歩すすんで「天上天下唯我独尊」の誕生偈を初声とされたのである。

わが国にも、いろいろな誕生仏がみられる。

私は、東京、京都、奈良の各国立博物館に電話でたずねてみた。

けっきょく、誕生仏のまとまった資料は奈良にしかな

いことがわかった。特に奈良国立文化財研究所で『古代の誕生仏』というのが、資料としてまとめられていると教えていただいた。

釈迦の誕生仏への興味というと、自坊で花まつりにまつる小さな誕生仏と、もう一つは中学生の頃だと思いが、東京国立博物館で東大寺の大形の誕生仏の展示に出あい、売店で四つ切りの写真を買ってきて、宝物のように大切に保存してきたことぐらいである。

今日まで誕生仏について深く調べることもなくすごしてしまったことを恥じている。

さいきん、日本の美術『誕生仏』が至文堂からでていることも、友人からきいて知ったのである。

誕生仏というと、だれしも指上指下の仏とばかり思いがちだが、誕生(出胎)のありさまを立体化したためずらしい像がある。

これは明治十一年に法隆寺から宮中に献納された御物で、いま上野の国立博物館の法隆寺館にある。「摩耶夫人・侍者像」といわれるもので、その一つは摩耶夫人が右手で無憂樹の一枝を手折ろうとしている姿であり、その衣服の長い右袖のところから、お釈迦さまが上半身を

のり出し地の方を向き合掌している像である。

この摩耶夫人は、出胎後七日目にはお亡くなりになってしまったのであるから、何とも悲しみを含んだお姿でもある。

ちなみに、上野の法隆寺館は、毎週木曜日に開館されている。ただし晴天のときに限られているようである。

蛇足ではあるが、誕生仏の手のあげ方一つみても大へん興味がある。

どれもみな、右手をあげて左手はさげているとばかり思っていたら、その逆のものもたくさんあるのだ。さらに変わっているのは、手のあげ具合や指の表現も実にさまざまなのである。

お釈迦さまのご誕生をたたえる花まつりは、仏生会・浴仏会・灌仏会・竜華会などと呼ばれ、推古天皇の十四年(一三七四年前)、元興寺においてははじめられてから、今日まで行われてきたのである。

一般に「花まつり」と呼ぶようになったのは、明治以降のことであり、浄土宗でいいはじめたのだそうである。また、甘茶を用いるようになったのは江戸時代にな

ってからだという。

導師は、散華をしながら花御堂を右繞三匝する。花御堂の正面にもどって小杓を手にとり、次に「灌沐偈」を唱えながら、甘茶を三たび誕生仏の仏頂にそそぐのである。

我今灌沐諸如來

淨智功德莊嚴聚

五濁衆生令離苦

願証如來淨法身

灌沐偈は、お釈迦さまに甘茶又は香茶をそそぐ功德によつて、濁世の人びとが苦しみを離れられるようにと願う偈文である。

花まつりというと、檀家の人たちは草団子と砂糖の入ったきな粉をそえて、仏前にご供養したものだ。そして、それぞれ持参の空ビンに甘茶をつめて帰っていくのである。その甘茶の効能も、昔から土地土地によつてまことに多彩である。

友人の禪僧から「甘茶」をわけていただいたところ、それはある宗教団体で生産されているもので、「甘茶」を「天の茶」と書いて、「天茶」（あまちゃ）と読ませてあった。

この団体の信者は毎日ご供養しているそうだが、「天

茶は、お釈迦さまの誕生に深いゆかりをもち、古くから万病不死の靈藥として尊ばれているが、昔の人が甘茶を飲んだのは単に自然の甘味を楽しんだだけでなく、藥効を体験的に知っていたからだ」と袋に説明されている。

「天茶をご供養すれば先祖が喜び、飲めば血を浄め、お風呂に入れば肌はつやつや、体力増強、一家ニコニコ」とのことである。

卯月（四月）八日といえば、お釈迦さまの「花まつり」ときめつけているが、民俗学の立場からみると「花見八日」とか「卯月八日は山登り」などといって、農耕生活をしてきた日本人の「花まつり」だったようである。

柳田国男著『先祖の話』の中には、「卯月八日は、大昔の新年であつた……」とでている。そういえば、四月は新入学、新学期、新年度、就職……と、みな希望に羽ばたく年度がわりの月である。まさに一年の始まりなのだ。

毎年四月八日になると、各宗の友人から花まつりの賀状が何通かとどく。

「花まつりのよき日に みなさまのご清福をお祈りし

ます」「これをもって年賀のご挨拶に代えます」「仏誕紀元〇〇〇〇年四月八日」などの祝いの文句が入っている。

一月にたくさんの年賀状をもらうよりも、仏教徒らしくてまごころがこもっているような気がする。

クリスマスになると、日本人のほとんどがにわかクリスチャンになってしまう。それもコマージュリズムにおどらされ、馬鹿さわぎをしているにすぎない。信者さんは迷惑していることだろう。

私自身、お恥しいことだが、子どもに「クリスマスなど関係ない」と叱りつつ、買わされているのである。

それに比べて、「花まつり」はどうであろうか。花御堂をまつり、甘茶の接待だけしておればよいというものでもあるまい。どこの寺へきいても、参詣者は少ないという。

へ 春がきた 春がきた どこにきた

山にきた 里にきた 野にもきた

この歌のごとく、花が咲き、鳥も鳴くすばらしい季節だというのに……。

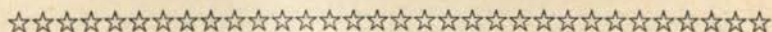
もし、お釈迦さまがお生まれにならなかったら、私たちはどうなっていたであろうか。この世に、お釈迦さまがお生まれになったからこそ、私たちは迷夢をさませられ、とうとい阿弥陀さまのみ教えにあわせていただくことができたのである。

私は、アシタ仙人の落涙の話を思い出す。「お釈迦さまが仏陀となられる日まで、この老境の身では待ってられない。生きているうちに、ありがたい教えをきくことができないと思うと、悲しくてつい涙がでてしまった」というのである。

私たちは二千五百年後の今日、仏法流布の世に生をうけたことは、盲亀の浮木にあえるがときよろこびなのである。

それなのに、昨日も今日も、ただいたずらにすごしている人びとのいかに多いことか……。

四月八日の花まつりには、法然上人のご法語である「登山状」を拝読して、お釈迦さまのお誕生を心からお祝いしたいと思うのである。



〈随想〉

ほとけとの出会い (七)

佐 竹 隆 三
さ たけ りゅう ぞう

(大正大学教授・医博)



「唯識」の原語は *viñāpti-mātra* であります。

viñāpti は動詞 *vi-jñā* (知る) の使役活用語幹をもとにしてつくられた抽象名詞で、標識、記号などという意味なのでありますが、唯識学派の術語として、それは心に映じ出された「表象」をあらわしているようであります。

ただし、表現は、それに対応するものとして、外界に存在する「何ものかの標識」なのではない。「ただ……のみ」という意味の *mātra* が *viñāpti* という語に付加しているのは、表象以外に、表象される、なんらかのものが外界に存在するという見解を否定するためであるといわれているようです。

つまり、「唯識」とは、ただ表象があるのみで、外界の存在物はないという思想なのであります。

それでは表象はどうして現われるのでありましようか。そのことを説明するのが、「識の変化」という学説であります。

「識」(*viñāna*)とは認識機能のことで、「心」(*citta*)「意」(*manas*)がその同義語とされています。厳密に言えば、「識」とは視・聴・嗅・味・触覚器官および思考力を媒介とする六種の認識機能(六識)で、「意」はそれに伴う自我意識(末那識)を、「心」は通常の認識機能の根底にある潜在意識(阿ーラヤ識)をあらわすのでありますが、意も心も

認識機能の一部であり、広義の「識」概念に包括されるのであります。

精神病理学や深層心理学を専攻したわたくしにとっては、知覚・思考・自我意識・無意識（前述のアラヤ識は深層心理学ではほぼ無意識に該当すると考えよいと思われる）を一括して「識」と呼ぶことには若干無理があり、抵抗を感じますが、こんなことに拘泥してはこれ以上の考察はできないことになりますので、目をつぶってさきに進むことにして、今少し「唯識学説」の説くところに耳を傾けることにしましょう。

六種の認識機能と自我意識とは、潜在意識に対して「現勢的な識」(pravṛti-vijñāna 転識、現行識)といわれます。潜在意識が現勢化し、現勢的な識がその余力を潜在意識としてのこすことが「識の変化」であります。

わたくしの理解した限りでは、無意識の内容が意識化されたり、意識内容が逆に無意識の底に沈下してわれわれにもはや意識されなくなるというプロセスを「識のバリナーマ」と呼んでいるらしいという

ことであります。

要するに、認識機能をただその現勢的なあり方においてのみとらえるのではなく、機能の根底に自我意識や潜在意識のあることを認めて、それらをも「識」とよぶところに唯識学派の識論の特色があるようであります。そして、「識」が自らの作用を知らしめる標識が表象であります。

原始仏教以来、人間存在は諸種の構成要素の集まりとみなされ、構成要素以外に恒常不変の自己^{アトマン}があるという見解は否定されています。アビダルマ哲学者たちは、考察の範囲を人間の存在をこえて人間のかかわる世界にまで及ぼし、究極的な存在要素を、

(一)物質的存在(色)^{しき}

(二)心

(三)心作用(心所)^{しんじょ}

(四)心に伴わぬもの(心不相応行)

(五)無制約的なもの(無為)

の五種に分類しました。

そして、唯識体系においては、心すなわち識がこれらすべての存在要素を統合すると考えられている

ようであります。

世界は心の中に収められ、その心は生じた瞬間に滅して次の瞬間の心と交替し、こうして生滅する心が一つの流れを形成します。人間存在は「心の流れ」(citta-santāna 心相続)であり、心を離れて外界に存在すると一般に認められているものも、心が生み出した表象にすぎません。外界の物質的存在が心に映写されて表象が形成されるのではなく、心がみずから表象を生み出すのであります。

このような唯識思想は、大乘仏教における観念論の哲学として性格づけられるのであります。

ところで、心が存在するすべてのものの根源とみなし、あらゆるものは心が生み出したものであると考える観念論的傾向は、唯識体系においてはじめてあらわれたのではなく、インド思想史上古くたどることができ、ウパニシャッドや原始仏典にも見られますが、わたくしにとって興味のあるのはサーンキヤ学派の「純粹精神」(puraṇa)であります。

人が純粹精神を自覚するとき、原質から開展した一切は帰滅し、したがって思惟機能も止んで純粹精

神が独存する状態に達します。それが輪廻からの解脱であると言えるのではないのでしょうか。

心は本来清く輝いているということとは、『般若経』その他の大乘經典にしばしば説かれておりますが、光り輝く心を「心の本性」(citta-prakṛti)としてとくに強調し、それを最高の実在とみなしたのは如来藏思想の系譜に属する『究竟一乘宝性論』(原題は Ratnagotravibhāga で「八仏／宝の本質の分析解明」の意)であります。

如来藏思想は『華嚴経』(性起品)における「如来の出現」(cattagata-rūpaṭi-grahana)の思想を繼承発展させたものと推定されます。如来の出現とは、釈迦が最高の真理を悟って仏・如来となることを意味すると同時に、その如来の本質である法身が、さまざまな化身(けしん)の姿でこの世に顕現し、身・語・意のはたらきを示現することをも意味したのであります。

如来の法身がこの世に顕現するという考え方は、衆生の一人一人に如来の本質、すなわち仏性が宿っているという思想へと展開します。この仏性が衆生

(す)
(い)
(そ)
(う)

英国のパブリックスクール

ながとろ のぶ ゆき
長戸路 信 行

(千葉敬愛経済大学助教授)

チャーターハウス・パブリックスクールは英国でも五指に属する名門校だという。ロンドンの中心から車で一時半たらずの郊外にある。三十万坪の芝生と森とがゆるやかに波打ったかに、ネオ・ゴチック風の建物がひっそりと静まりかえっている。この学校はもとロンドン市中にあって、十七世紀の初めに創設された同名の養老院の附属校として発足したものであったが、よりよい教育環境を求めて、一八七二年、あなぐま猧の行われるこのゴドルミングの丘に移って来たのである。

私が教育者ばかりの視察団の一員として参観したのは十月中旬のことだったが、あいにくの雨で、副校長先生の言葉によれば、今秋はじめての本降りの雨だという。しかしそのために広大な芝生のグラウンドの緑が、見る者の目を洗うような鮮やさであった。ここに七〇〇名の、十三才から十八才までの男子生徒が全寮制の生活を送っている。

パブリックスクールと云うからにはエリート教育をもって自任するのは当然かもしれないが、副校長先生の説明の中にも、「昨年度の本校卒業生のうち、オックスフ

オードおよびケンブリッジ合格者は何名、その他の大学合格者は何名」というような言葉が平然と出てくる。日本では予備校の広告以外ではめったにこのような言葉は使わない。日本の一流受験校の校長先生に「お宅の東大合格者は何名ですか」と尋ねれば、校長先生は少し当惑顔で、「えっ、まあ、平均五、六十名というところでしょう。か。年によって変動がありまして……」とか何とか答えるであらう。

非常に立派なチャペルに案内されたが、奥行の深い礼拝堂の両側面に、階段状の席が設けられている。もちろん生徒一人一人の席が決められているのであらう。上段にゆくほど上級の生徒の席になっているらしい。入学生の宗派は問わないが、学校としては英国国教会の礼拝を全生徒に要求しているそうである。この学校の卒業生で、もっとも有名な者の一人にジョン・ウェスレーがいる。言うまでもなくメソヂスト派の創設者であり、英国の生んだ偉大な宗教改革者だが、国教会からは締め出された人だから、副校長先生の口から「本校卒業生で有名なのは……まずジョン・ウェスレー」と紹介された時は、ちょっと妙な気がした。

十九世紀の皮肉と風刺の作家サツカレーも卒業生だが、英国文学史の中ではやや異色の作家と云ってよいであらう。もう一人異色の卒業生に一九二四年エベレストの頂上近くで消息を断ったジョージ・マロリーがいる。かれを記念する銅板が石の壁にはめこまれていたが、私はそこに立って「ここがマロリーの母校だったのか」と、若い頃に読んだエベレスト登山史の感激を新たにした。

昼食前に授業参観をさせてもらった。フランス語の専攻は私だけだったので、ほかの団員と別れて一人だけ、案内の生徒のあとについて教室に入った。私を案内してくれたのはベンジャミン・シーバート君と云って、年をきいたら十三才だと云っていたから、一年生のクラスである。先生は若いフランス人のマダムで、英語は堪能なのだが、生徒にはフランス語しか分らないと思ひ込ませてあるそうである。生徒が順番に立ち上って物真似をする、みんながそれをフランス語で言い当てる。一人の生徒が傘をさす仕種をすると皆いっせいに「かれは傘を持っている！」と叫ぶ。マダムがそれに応え、窓の外を指して「今日は雨が降っている」と言う。ある生徒がい

きなり机の上に立ち、両手を揃えて前につき出して床に飛びおりたのでみな笑い出した。何のことか分らない。

するとかれはやにわに床に腹ばいになって両手両脚をばたつかせはじめた。生徒たちは総立ちで、なかには椅子の上に乗ってのぞきこむ者もあり、教室は笑声と歓声につつまれる。「泳ぐ！」と答えた者が多かったが、多分本人は飛び込みのつもりだったのであろう。

買物物の問答もあった。マダムが、パンを買うには何の店に行くか」という質問をすると、生徒が「パンを買うにはパン店（ブランジュリー）に行く」と答えるのである。それらの単語はすでに教えてあるのであろう。それでもなかなか答えが出なくて皆が黙ってしまふ時がある。するとうしろの方の席で誰れかが小声で「ハロツズ（ロンドンのデパート）に行く」と言う。みんながどっと笑い、マダムが教壇の上で肩をすくめる。まことに和やかな授業で、日本の標準的な教室風景にくらべたら、かなり自由な雰囲気だけれど、行儀がわるいと云う印象は受けなかった。

授業参観が終るとまたシーバート君が先に立ち、ブラタナスの並木道を寮の食堂へ案内してくれた。七〇〇名

の生徒が十一の寮に分れて住み、それぞれの寮に食堂があるから、一つの食堂で六、七十名の生徒が食事をするわけである。五つのテーブルに各学年ごとに坐り、当番の生徒が皿を配って歩く。私はシーバート君と並んで十三才組のテーブルに着いた。号令でみな一斉に立って、最上級生が食前の祈りをとなえ、アーメンを唱和してから食事が始まる。

食事の最中もシーバート君がいろいろ話しかけてくれた。十三才にしては小柄で、顔も青白く、ややひ弱な感じのする少年だったが、客人を接待する役割に責任を感じているらしく、ひかえ目ながら、何とか話題をみつければ、しかも私が聞きとりやすいようにゆっくりと喋ってくれる。「オリガミ」が好きで本を見て練習しているなどと云う。上品な感じの少年で、いったいどういう家の子供だろうかと考えた。このパブリックスクールは昔から貴族の子弟は少く、富裕な市民階級を対象として来たそうである。どの生徒も、私が漠然と頭に描いていた、活発でややさうぞうしい欧米の子供の姿とはかなり違って、少しはにかんだような表情で異国の「先生」に接する様子は、むしろ私にはなじみやすい。皆が食事をし終

つたところを見はからって、また最上級生が号例をかけ、立って感謝の祈りをささげ、アーメンをとなえる。

さてシーバート君がまた私の先に立って、次の見学予定に向おうとした時にちよつと意外な事が起った。食事が終ったからと云って先を争って出口に殺到するような生徒たちではないから、ゆっくりとした足どりで戸口の方へ流れ出した時に、上級生が手まねで生徒たちを通路の両脇によせて、私たち（私のほかにもう三人の視察団員が別のテーブルについていた）を先に通させようとした。シーバート君は私の案内に立っていたのだから、当然私の前にたつて生徒の垣根のあいだを進んで行つた。すると通路の脇に立っていた大きな体の上級生がいきなりシーバート君の胸を突き飛ばしたのである。体の小さなシーバート君は文字通りすつ飛んでしまった。私は一瞬訳が分らず、足をとめて茫然としたが、すぐにその大きな上級生の誤解に気づいた。何とか言つてやらなければいけないと思つたが、周囲の生徒たちは全く顔の表情を変えず、平然と私の通過を待っている。その生徒たちの列のうしろで、シーバート君も唇をかねて黙っている。私はその雰囲気になされ、口の中の単語を飲み込んで、ふら

ふらと出口に来てしまった。

出口で三人の団員と落ち合い、一人の上級生の案内で歴史学の教授の私宅（校内に与えられている）に行き、広い芝生と森を見渡す応接間で紅茶とクッキーを御馳走になつた。しかし私が歴史学の先生のお宅に上つたのは飛び入りで、ほんとうはシーバート君の案内でフランス語のマダムのお宅へ行く手はずになつていたのではないだらうか。そのあと校内見学が続いたが、もちろんシーバート君に合う機会はなかった。

英国の大学は、日本とは異つて、依然としてエリート
の養成機関である。オックスフォードとケンブリッジばかりではない。大学生の数そのものが日本とは較べものにならないくらい少ない。そのエリート（いわゆる英国紳士）となる者の心身を鍛えるのがパブリックスクールの厳格な生活規律だと云われている。食堂の一件に私は英国の教育の真髄を垣間みた思ひであつた。あの小柄なシーバート君の唇をかたく噛みしめた顔を今でも思い出す。かれは自分を突き飛ばした上級生にきつと一言も言ひ訳をしなかつたであらう。

浄土句集



悴^{せじか}みて合掌の指伸びきれず
福岡 荒牧 還愚

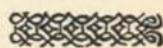
評 合掌をする時は、五本の指をしっかり
伸してびったりと合せねばならぬ。悴^{せじ}ん
でいれはなかなか思う通りにならぬ。

初誦経長寿祝の赤座蒲団
東京 阪入 等達

評 長寿祝に貰った赤座蒲団は誕生日に敷
かず、元旦に初めて用いられ、それに坐
つての初誦経をすれば、先祖もさぞ喜こ
ばれ、先祖の守護にて更に長寿されん。

東京 阪入志津枝
初雪のさらりと積り消えにけり

一田牛畝選



評 初雪が積ったかと思っていれば、直ち
にさらりと消えて行くのをよく読まれ
た。

三狼の絵馬を飾りて初点前
東京 猪瀬 幸子

評 見ざる(狼)、聞かざる、言わざるの三
狼の初詣で授った絵馬を飾って茶会が行
われている。三狼の如く茶会は静々と。

雪の径^{みち}先なる人の足たどる
福岡 稲永 新

評 雪の径は危険である。雪の下には大き
な穴があるかも知れぬ。足あとをたどれ
ば、無事目的地に達することが出来る。

寒煙の池に五重の塔うつる
福岡 永江 隆説

雪の朝何はなくとも母のもと
山形 松田 允子

着ぶくれて老母卒^{きじ}寿の誕生日
福岡 服部 光代

燈明をあげるも仕事始かな
東京 新井 新生

風に向き丹頂鶴の飛びにけり
東京 栗原やえ子

おほらかに手締め目出度き初荷かな
東京 田中 秀代

小豆粥母の面影偲^{おも}はるる
東京 末常てる子

遺教の一句掲げし涅槃寺
愛知 渡辺 杜水

東京 細田 初枝
春寒し水子地蔵に鳴る風車

東京 星野 小登
挨拶の正座の孫へお年玉

群馬 島津 か寿
春愁や寺住なれど解脱難

福岡 上滝津弥音
指示通り退屈なれど風邪籠り

東京 島居 千代
夕空やおでん屋さんの鈴の音

山口 三井 寛静
霜柱踏んで登りし神籠石

福岡 三牧 重利
雪まつり遠く来し甲斐ありにけり

東京 吉田ゆきえ
初孫の誕生ありて寒に入る

大阪 秦 心隆
老梅の寺の由来を語るかに

福岡 高良 慈風
本堂の大屋根替へに門徒衆

三重 森 静枝
霜踏みて祖父の墓前によきしらせ

東京 栗原とも子
春を待つサイネリアの鉢窓に置く

東京 小笠原香祥
お降りに裳裾濡らせし客迎う

山形 松田 光譽
ポストへの道遠くする雪の嵩

大分 丹羽 難中
豆まきに京の土産の五色豆

京都 安藤 寛
暖込むや電話の相手待ち呉れし

埼玉 佐久間愛子
凍て雪を音立て踏みて帰り来し

福岡 権藤みきを
日出でて修正看経いと高く

東京 鈴木 葉子
ふる里の舌鼓うつ雑煮かな

福岡 高良 幸代
日課とて竹踏み窓の寒夕焼

福岡 国友 星歌
開口に梅の便りを高座より

東京 真野よし子
若水の茶を御仏に供へけり

三重 山田 うた
慣例の節分まいり観世音
御満座の花の雨なる開山忌 一田 牛歌

念佛ひじり三國志

(三)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



一

夜伽。

と、言っても仕事らしいものはないはずだった。また、盲人の生仏では何事も弁じ得なかったであろう。

要するに法然の話相手である。

法然という人は、よほど話好きだったらしい。

この時、だけに限るまいが、孤独癖で性格に屈折のある人は、手マメに手記類や文章を書きのこしている。感

懷を歌に託したりする。逆に明るい人柄は、天空快々にしゃべりまくる。他人の話にもよく耳を傾ける。文章をひねくりまわしたり、メモを取ったりはしなかった。よくしゃべる反面、記憶力も抜群であった。

法然に遺文らしいものが殆んど残っていない事実もこの性情から発しているからか。ただし、これを理由にして法然が無筆、文章を書くのが苦が手だった、などと憶断するのは大間違いである。昭和三十七年に奈良興善寺の本尊阿弥陀像から発見された「胎内書状」——法然自身の手紙はじつに流麗でうるおいのある文章だ。名文と

言うよりも、書き慣れた能文である。法然が、弟子や信者にはせつせと手紙を書いていたのであろうことが察せられる。

天空快々、法然の明るい性格。必ずしも天性のものだったとは思えない。幼時には父の横死に遇ったり家郷をあとにしたりで苦勞をしている。比叡登山後も智恵第一と呼ばれたほどの勉強家だ。おしやべりをする暇（ひま）なぞなかったであらう。

やはり後年のもの、それも四十三歳、専修念仏に開悟した以後の「第二の性格」だったと思われる。それも念仏の本義、他力の教えを如何に易しく大衆へ伝えるか、その説法が日常生活へ浸透していったにちがいない。

この明るさ、話好きの人柄だからこそ盗賊の耳四郎とか、悪陰陽師の阿波之介などと心をかよいあえたのでもあろう。

その晩も生仏をかたわらに、法然は「夜話」を楽しんだはずであった。生仏にとっても兼ねてから心を傾けつくしてきた「お方」とじっくり話こめる嬉しさに全身を熱い血が駆けめぐったことであらう。

さて、二人の間でかわされた「夜話」の内容だが、も

前号のあらすじ

京都において専修教団の興隆を画そうとする善恵房証空。これに対して、かねてより鎌倉方と交わりの深い安樂房遵西。二つの筋道に別れた二人が、今必然的に争い合う結果を招いていた。ことに安樂房が証空を殺害しようとする噂が……。盲目の生仏は、そのことを語るために、師の法然上人を東山吉水の禪房に訪れていた。しかし、師の上人は老病の床に静かにあり、この悲しむべき内紛について、ただ一言、「私には判らない」とか細げに答えるだけであった。そしてその日、吉水を訪れた安樂房の質問に対して、師の上人は、「どちらが先だ、どちらが正しい、と争うことさえなければ、さまざまなる角度から阿弥陀仏のお慈悲に浴することが出来る。要は争わぬことです」といったきり、一切の感情を除き去った穏やかな心で、床の上にあった。

とよりうかがい知ることとは出来ない。小説の世界でそれらしきものをとらえるだけである。

ただ、ずっと後年における生仏の決断から、強い使命感にもとずいた言動から推量すれば、この夜あたり法然は重要な示唆を洩らしたのではないであらうか。法然と生仏の接触は、このあと殆んど持たれた形跡がないからである。

重要な示唆とは何のことだったのであろうか。

「私は待っている」

闇の闇のなかで、法然はいきなり呟いた。

「何をお待ちですか」

「弁長が帰ってくるのを」

「弁長……」

「ご存知なかったか、聖光房弁長。鎮西の地から唐の国へ渡ったはずです」

「唐の国へ？」

「善導和尚の遺跡を訪ねていることでしよう。長安の光明寺か、終南山の悟真寺か、そこが消滅していれば西河（山西）石壁山の玄中寺、どこでもよい。善導和尚ゆかりの地に錫を印してくれさえすれば……」

法然は熱願している。この晩年に及んで、それだけを待ち望んでいる感じであった。

生仏にもやがて、法然が熱願する内容と理由を知らされる。

偏依善導の法然は、浄土念仏教団を確立するにあたり、何としてでも善導その人からの師資相承を得たかったのである。ただし、五百年をへだてた歳月は「血脈相承」を不可能にしている。この点は法然自身が体験した

「夢感対面」で解決した。

それにしても善導和尚が生きた聖蹟から土のひとくれでも持ち帰って欲しい。これが法然の熱望であった。かつて、渡唐した大仏勸進上人の俊乗房重源に「浄土五祖像」の図を持ち帰ってもらった。しかし、こんどは教団の確立を意図しており、師資相承の目的のためだけに法然は聖光房弁長を京都から送り出した。彼の故郷、鎮西の地から船便を得て大陸へ渡航すべし。

法然の「夜話」は善導和尚を語って尽きるところがなかったであろう。

だが悲しいかな、法然には現実の情報が無い。

建永元年（一二〇六）のこの時期、中国大陸はどんな情勢だったのだろうか。

大陸は三つの民族がそれぞれの版図を支配していた。淮河から南は漢民族の宋朝だった。北方はトゥングス系の女真族が樹立した金朝である。同じ北方でも大黃河の湾曲部から西方はチベット系タングート族の西夏国の支配下にあった。

だが、この三国分立もじつは風前の灯だったのだ。モンゴルに強大な軍事国家が出来つつあった。チン

ギス・ハンが率いるモンゴル帝国である。

チンギス・ハンが勃興期、意識して中国内陸へは目をつぶった。西方の国々を荒しまわった。当時、西域と呼ばれた中央アジア諸国、さらにロシア、歐洲の国々を蹂躪したのだった。そしてこの十三世紀の声を聞くと、馬首を東アジアへめぐらせた。

すでに西夏国は席捲され、金朝も南方へ追い詰められ、これから半世紀も経ぬうちに金と宋はいっついで崩壊したのであった。

中国全大陸を支配したモンゴル族は朝鮮半島を制圧し、やがて日本列島へ襲いかかる。文永十一年（一二七四）のことだった。

こんな情勢である。道元禪師など、わずかな例外を除き、大陸への渡航どころではなかった。逆に宋、金から仏教僧が九州の地へ亡命してくるほどであった。

伝によつては弁長が大陸へ渡った、とある。考えられない。道元が貞応（一二三三）から安貞（一二三七）へかけて巡錫した地は江南の浙江沿域に限定されていた。善導の遺蹟がある長安、洛陽、さらに山西は西夏国の支配下で、しかもその西夏はこの時期、すでにモンゴル族

の馬蹄で踏みにじられていたのである。

渡宋ではなく、筑後善導寺の大師像や経巻類は亡命僧がもたらしたものではないであろうか。

わが師法然から託された使命を達成できなかった聖光房弁長は、鎮西の地に腰を据えて念仏教化に乗り出さずにはおれなかった。昏迷は海路遙かな中国大陸だけではない。わが師法然がいま京洛でさえ念仏門は断崖され、法然は流罪、間もなく入寂、という絶望的な情況に追いこまれてしまうのである。

弁長がたのむのは一心専念の称名念仏しかなかった。わが師法然の教旨を、ひたむきに守りぬくことだけだった。

弁長はやがて筑後、三井郡山本郷に一寺を建立した。善導和尚像をかかげ、光明寺と名づけた。長安で善導和尚が説法に心血をそそいだ開明坊の光明寺になぞられたのである。だが、弁長の寂後、念仏門徒たちはこの寺を、ずばり善導寺と呼んだ。

念仏門の師資相承を唐の善導和尚と直結させたいと熱願した法然。その意志を忠実に受け継いだ弁長。師弟ひとすじの心を、鎮西の念仏者たちは善導寺と呼び慣らす

ことで後世へ語り継ごうとしたかったようである。

二

話は、その後世へ流れ下ってゆく。

嘉禎二年（一二三六）九月のことだ。法然が東山に寂して四分の一世紀ほどが過ぎ去った。

石見国（島根県）三隅郡の多陀寺に突然、盲目の生仏が現れた。そこに隠棲する僧良忠を訪ねてきたのである。

「筑紫へゆきましよう」

生仏は、いきなり言った。

「筑紫へ……何のことでしょうか」

「あちらに聖光房弁長という、すぐれた念仏ひじりがいらっしやる。このお方こそ、源空上人の後継者にふさわしい」

「それが、私とどういう関係があるのでしょうか」

良忠はとまどっている。

「あなたはその弁長上人から浄土の源流を受け継ぐのです。あなただけがその資格を持っています」

すでに年老いた生仏は、一途であった。

「浄土の源流ですって？ たしかに私は年久しく善導和

尚や法然さまの教えに親しんでまいりました。念仏にも励んだつもりでございます。しかし、ほんらい私は異流の者です。わが師良遍は浄土の教えに心を寄せるとは言え、法相の学匠です。私自身も法相を軸に八宗を學んでまいりました。一切の名利を捨て、専心に弥陀の教えに仕えようと決意したのはここ三年来のこと。だからこの寺に引きこもったのです。それが浄土の源流など……」

良忠ならずとも当惑したのであろう。

見ず知らずの盲目の老法師がいきなりやってきて、無名の田舎坊主にいきなり、汝こそは法然念仏の直流を継承する候補者である。これから鎮西の地へ、二代目たるべき弁長上人を訪ねよう、と言いつのるのである。

「いや、貴僧をおいて他に誰もいない」

「しかし京洛には吉水直門の勢観房源智上人がいらっしやるでしょう」

「勢観房どのとて、すでに七十の坂を大きく踏み越えた高齢です。鎮西の弁長上人と老いを争っている。後継者としてふさわしくはない」

<善導和尚像>



ちなみにこの年、良忠は三十八歳であった。

「勢観房上人にも立派なお弟子が幾人も……」

「良忠どの。これは如来さまがこの生仏に申し下されたことなのです」

「如来さまが？」

「信濃は善光寺の如来さまが生仏の枕もとにお立ち遊ばされ、こう申し下された。滅びゆく念仏門、法然から弁長へ受け継がれた正信正法を継ぐ者は石見路にしかおらぬ。多陀寺に隠棲する若き念仏僧のみ、とな」

生仏はきっぱり言い切った。

これが有名な浄土宗における二祖から三祖への師資相承伝説である。

良忠——後に記主禪師と呼ばれた三祖は、鎮西へ下る。生仏ともどもに天福寺で聖光房弁長と会う。そのまま師弟の契約を結んだ。良忠が弁長の膝下にあったのは一年そこそこであったが、浄土法門の奥義を伝法したのである。

伝説はそのまま尊重しなければならないが、これを生み出した背景にも適確な視線を集めねばならない。伝説伝承はつねに現実の象徴化だからである。

盲目の琵琶法師生仏は善光寺如来の託宣をかりて、無名の記主良忠をいきなり三祖の候補者に指名した。そこにはどんな背景と条件があったのであろうか。

この嘉禎二年の前年の三月、念仏ひじりの中でも特異な存在だった安居院の聖覚が寂している。六十九歳であった。

聖覚は、当時「富楼那尊者」の再来とされた澄憲の実子である。彼自身の説法にすぐれていたらしい。明遍の甥にあたる。

僧としての毛なみは抜群で、比叡山念仏における檀那、専心、両流の相伝者となっている。ことに専心流では顕真座主の直系を明禪と分け合う。

聖覚がいつから念仏門に身を投じ、法然に師事したかは不明である。しかし熊谷蓮生房の入門を手引きしたり、建暦二年の三月、法然滅後六七日の中陰法要で導師をつとめたりして、有力な「法資」であったことはまぎれもない。

「明義進集」の筆者は、

源空上人ニ日頃ノ妙戒ヲウケ、浄土ノ法門ヲツタ

フ。上人ツネニノタマヒケルハ、吾カ後ニ念仏往生ノ義スクニイハムスル人ハ、聖覚ト隆寛トナリト云々

と、伝えている。

聖覚法印の筆になったと言われる「黒谷源空上人伝」は「十六門記」とも呼ばれて、重要な宗門資料である。「十六門記」が果たして聖覚自身の手になったものかどうか。古来、論議を呼ぶところだ。聖覚仮託説の軸点に、その成立年時が指摘される。

安貞元年極月上旬、と冒頭で明記し、末尾には「数年積功、親承浄教了」と添えている。これはおかしい。安貞元年は嘉禄三年にあたり、この年六月には山門の衆徒が法然の墓をあばこうとし、さらに翌七月には隆寛、幸西、空阿弥陀仏らが流罪に遇うという大法難の時機だ。こんなときに「数年ノ功ツモリ」浄教を終えたなぞと暢気な文章が書いておられるか。

聖覚の名を仮りたずと後年の作だ、とする。

だが「十六門記」を平板な「伝記」としてだけ読んでよいものかどうか。歴史的事実を並べることが目的とし

た書であつたかどうか。

視線をわれわれはそこに据えてかからねばなるまい。

「十六門記」とは、「上人ノ行状ヲ述ブルニ、略シテ十六ノ大門有リ」で、法然の生き方や教え、さらにはその評価を十六章に分けて論述している。各章がそれぞれに主題を持ち、聖覚自身の思考や主張が脈々としている。

だから、かりに聖覚が自ら筆を執らなかつたとしても、この訴えに変差はない、と言える。

例えば最終の「没後逆縁利益門」では法然を流罪におとし入れ、今また嘉祿の法難を招いた体制者に痛烈な批判を浴びせかけているのだ。

讃岐へ流罪と決まつた法然が、この法難を地方教化の好機と受けとめ敢然と京を去ってゆく勇姿を活写し「其後いくばくの歳月をへず、わずか十箇年の間に承久の逆乱おこりて天下の騒動に及び、君は北海の島に行幸して隠岐院と号す。護臣は戦場にて討ち負けて或いは命を失う者もあり。まことに不思議にぞ侍る」ときめつける。

嘉祿の法然墳墓あばきでは爾前に暴挙を知つた京都守護の北条時氏の口をかりて「たとえ公家のお許しありと言うも、子細を武家に触れ申すべきところに、左右な

く、これを執り行わるるの条、もつとも狼藉なり」と、この暴挙を許した朝廷をなじらせている。

また時氏の家来で、ひじり名を西仏と名乗る盛政入道は、山門の衆徒の群れに立ち向い「念仏守護の四天王大王竜神八部。護法天童に代り奉りて、弟子西仏、魔縁を排し侍らん……(中略)……西土の念仏者として師恩に報じて凶徒を罰すべし」と呼ばわって蹴散らしたと伝える。

このあと宇都宮入道も六百騎を引きつれて駆けつけたことを報じ、鎌倉武士の法然信仰への熱烈さをうたいあげた。

明らかに事件を描写しただけの文章ではない。

三

「十六門記」の第十「勸進念仏往生門」は示唆をふくんだ一章と言えるであろう。

南都東大寺の焼亡、復興の勸進上人に法然が推挙され
た折、

源空が好ム所ハ念仏勸進ノ行ナリ。起立塔像ノ大勸進職ハソノ器量ニアラズ

と拝辞したエピソードに始まり、大原談義や靈山寺不断念仏における勢至菩薩と法然が並立した奇端。さらには後白河法皇の勸請による「往生要集」の講義など、念仏弘通の実績を次々と紹介している。

だがこれらの紹介以上にわれわれの眼をひく記述は、聖覚がじかに法然から「浄土宗ノ意」を伝えられた箇所であり、また鎮西の聖光房と並んで「口称念仏」や「三心発得」の妙意を説かれた場面であろう。

他の法然伝には見あたらない記述である。しかもかなりなスペースをこれにさく。いったい何を意図した章なのであろうか。

前章の第九「善導来現授教門」から読み受けてくると、聖覚の主張が明確になる。第九門は善導と法然の「夢感対面」であるが、そこで念仏門の正統な師資相承が強調されているわけだ。

唐の善導から法然へ。そして法然から聖覚を経由して鎮西の聖光房弁長へ。これこそ専修念仏の唯一とすじの

法系だ、と言いたげである。

聖覚の主張は、俊乗房重源の処遇にもにじみ出ている。まず法然の口をかりて「起立塔像ハソノ器量ニアラズ」と思想上からこれを否定する。大原談義でも参じた学匠たちからその名を削除。さらに重源を始祖とする「阿弥陀号」結社を、念仏門における「傍流」と見なす意図が、この章の末尾へ書き添えた文章からも匂ってくる。

つまり「十六門記」こそは、法然の後継者は聖覚法印なり、と訴えようとした宣言書の性格を秘めていたのではないだろうか。

安貞元年（一二二七）極月、という日付だが、そこにも深い意味がある。嘉祿の法難の直後で、京における念仏教団は潰滅に瀕しつつあった。

そんな時機に暢気な法然伝などを、と後世の人は嗤うが、これこそ「治ニ居テ乱ヲ忘ル」の発想だ。そんな時機だからこそ、聖覚は危機感をはらめて「十六門記」を書き上げたにちがいない。

筆勢から判断すると、第十四の「臨終念仏往生門」までと、あと二章とではやや異質のおもむきがある。いわ

ばこの伝は第十四の法然臨終「……睡ルガゴトクシテ息絶エ給ヒヌ。音声止ンデ後ナオ念仏ヲ唱エ給フトオボシクテ唇舌ヲ動カシ給ヘリ。春秋八十二満チ給フ」で筆を擱いたかのである。

しかし現実には迫り来る法難、潰滅に瀕しつつある念仏教団。聖覚は怒りと情熱をこめて嘉禄事件の内容を伝え、朝廷の非を鳴らした。鎌倉武士を頂点にして庶民大衆のあいだにひろがる念仏の正しさを訴えたのであった。

ちりぢりになろうとする念仏ひじりたちにこの「十六門記」を一読してもらいたかったにちがいない。

それを読んだのかどうか。一人の念仏ひじりが京へ馳せ戻ってくる。「十六門記」の日付から三年後の寛喜二年のことだ。帰京するや彼は安居院へ走る。さっそく聖覚が書いた「唯信鈔」を披読し、その筆写にかかっている。

彼とは誰か。関東にいた念仏ひじり緯空——親鸞である。

親鸞が「教行信証」の後序で、後鳥羽上皇の承久ノ変時の惨敗を法然流罪や念仏者の断崖へ結びつけているあ

たり、聖覚の「十六門記」に同調した跡がうかがえる。

嘉禄の法難後、京における念仏教団の内部事情は複雑だったであろう。

純粹で、ある意味ではラジカルでもあった専修念仏者たち、一念義幸西や空阿弥陀仏、隆寛らは流罪、追放された。

法然の内弟子という経歴、学殖、念仏信仰の深さ、とどの点でも後継者にふさわしい善恵房証空は、その政治的な動きに疑惑を持たれたためか、在野の念仏ひじりたちは彼を嫌忌した。

法然直系の勢親房源智を軸点に押し据えようとするが、彼には人心を掌握する器量がない。この点では嵯峨の二尊院に拠る正信房湛空にも同じ言葉があてはまるであろう。

複雑な実情は、嘉禄の墳墓あばき以後、たびかさなる法然遺骸の改葬が物語っている。すなわち東山から太秦の広隆寺へ仮埋葬されたが、やがて掘り出され茶毘に付して粟生野へ運ばれる。そこに眠ったのも四年そこそこで、三たび嵯峨の二尊院だ。

山門衆徒の凌辱を避けて、というよりも念仏教団内部

の争剋に原因がひそんでいたのではないだろうか。

粟生野(光明寺)に遺骸を埋葬し終えると、善恵房証空はただちに三結寺塔を建立して、西山を念仏教団の本拠地たらしめようとした。それが嵯峨の二尊院へ改葬されると、翌年には勢親房源智らは東山大谷の旧房を復している。嵯峨門徒や西山義をしりぞけて「本家」を主張するつもりであったか。

これら分裂した念仏ひじりたちを統一し、外に向けては教団への風当りを緩和できる実力者を求めるとすれば、聖覚法印へ衆望が集るのは当然であろう。彼自身も「十六門記」などをおして、その意慾は満々だったと推考したい。

だがこの時期、聖覚が明確に後継者の地位を掌握した、という確証はない。一つには在京の念仏ひじりたちが数少くなつて、教団の機能を失いつつあったからでもある。新しいエネルギーは遠い僻地でたくわえられつつあった。

その最大のものが聖光房弁長を頂く鎮西の念仏集団だ。

言ってみれば、聖覚はこの弁長との連立によって法然

の衣鉢を全うしようとしたのではあるまいか。

(つづく)

◇ “浄土句集” 欄投稿要項

- 一 ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
- 一 投稿先――

。〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

|| 新刊 ||

安居香山 著

『煎茶道』

新書判 一五八頁 価八八〇円

○近年めざましい発展をみる煎茶道に関する必携の好案内書。

(申し込み先)

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―一六

法然上人鑽仰会

二 編集後記 二

○受験シーズンが終って、新入生たちの華やかな学園生活がはじまった。ものみな輝かしく躍動し、新緑の若葉の萌え盛る四月。どうか若いいのちの息吹きが健やかに育くまれて、幸多い人生となりますように——と、その新しい門出を祝福して、心から願わざるをえない。暗く、辛かった灰色の季節が過ぎ去ったのだから、これからはその青春を自由に謳歌すればよいと思う。というのも、「新しい体験をおそれてはいけない」といわれる警句こそ、まさに若者たちの燃え燃える日々の生活そのままを象徴しているからである。「幸福な人とは常に行動している人である。時には勇氣をもつてものごとに立ちむかおう」——わたしもまた、この古くからいわれてきた言葉をくり返して、そしてみずからにはまた「よき聞き役であれ」という教えを肝に銘じながら、時には実際に勇氣をもって立ちむかっ

て行くようなことをしてみたい。

○ところで総本山知恩院での善導大師一千三百年のご遠忌法要は、きわめて盛大裡に勤修されたようである。わが『浄土』誌もまた、三月号を慶讃記念号としたわけであるが、続いて本月号及び五月号も特集号として、善導大師のご遠忌を縁として心から追思したのである。

念々に浄土へ教えを聞くことを思い文々句々に誓ってまさに勤むべし長時に流浪せる苦を憶想して専心に法を聴いて真門に入れ

(『法事讃』より)

○さて土屋正男画伯の表紙版画絵はなかなか好評である。ことに二五〇〇円という廉価で、豪華額縁に表装したすばらしい版画絵が購入できるとあって、まことに恰好の企画であったようである。まだ正月号、二・三月号分も残部があり、読者諸兄の早速のご注文をお待ちしたい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十六巻 四月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十五年 三月二十五日 印刷

昭和五十五年 四月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鐵仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

大 東 出 版 社

浄土宗学侶待望の覆刻

『浄 土 学』 (全八巻)

大 正 大 学 浄 土 学 研 究 会 編

A 5 判上製 各巻平均 600 頁 限定 300 部刊

昭和55年 4 月より隔月刊行

第一巻 定価 12,000 円

—— 予 約 申 込 み 受 付 中 ——

◎大正大学浄土学研究会編『浄土学』(第一～二十九輯)を善導大師一千三百年ご遠忌奉讃の一環として、全八巻にまとめ覆刻再刊致します。『浄土学』は宗教大学時代の研究誌『無礙光』を継承し、昭和五年三月に創刊された研究誌で、浄土宗学はもとより、広く浄土教に関する諸論攷を収載しています。今回の再刊に際し、各巻末に執筆者の紹介を、第八巻には新たに「浄土学関係雑誌論文目録」を付し、研究者の便益を計りました。

このたびの再刊が『浄土学』全巻を入手し得る最後の機会となります。お早目にご予約申込み下さい。

＜詳細内容案内謹呈＞

〒 113 東京都文京区白山 1-37-10

TEL 03 (816) 7 6 0 7

振 替 (東京) 3-5 7 2 0 7